

初任者研修プログラムの成果と展望

The Achievement and Prospects of the Training Program of Novice Teachers

細田 能成
HOSODA Yoshinari
(和歌山大学客員教授)

抄録：和歌山大学教職大学院における初任者研修プログラムは、現任校への訪問指導と大学院での授業を連動させることで、理論と実践の融合を実質的に担保するものである。関係者へのアンケート調査などから初任者の授業力のみならず省察力も向上していることが分かった。今後の展望としては、当該プログラムが学校全体での学びの文化の創出にも寄与できるものへと発展することにある。

キーワード：初任者研修プログラム、学校訪問指導、校内カンファレンス、学び続ける教師、和歌山大学教職大学院

1. はじめに

平成 28 年 4 月に教職大学院が開設されたと時期を同じくして、和歌山市内の小学校 3 校と中学校 2 校を連携協力校とし、そこに配置された初任者 10 名を対象に「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」をスタートさせた。本プログラムは、「学び続ける教師」の育成を目的に、平成 25・26 年度に実施した初任者研修高度化モデル事業を踏襲したものである。

私は、この初任者研修高度化モデル事業に実践的指導力を有したプロジェクト教員の一人として関わり、月 1 回大学で実施された合同カンファレンス(初任者、拠点校指導教員、校内指導教員対象)の企画・運営、並びに学校訪問における初任者や若手教員の研究授業の参観と指導助言を行った。また、本年度は「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」の実施責任者の一人として、プログラム担当教員とともに学校訪問指導を行い、さらには教職大学院における授業が、初任者段階で必要となる知識・技能の伝授にとどまらず、「学び続ける教師」としての基礎的な資質を身につける内容であるかを見続け、同時に初任者一人ひとりの成長を見守ってきた。

初任者研修高度化モデル事業は、上記の通り週 1 回の授業参観と自校カンファレンスを中心とした学校訪問指導、月 1 回の大学における研修を核とした内容で、初任者には学び合う仲間、専門性を高め成長を自覚す

る不断の努力、児童生徒を主体とした教育の実践と理論の往還、教師としての省察力の向上などの必要性を体験的に学ぶことで、平成 24 年の中教審答申で打ち出された「学び続ける教師」の基盤となる資質・能力の育成に迫ろうとする事業であった。何よりも教員養成機関の大学が、教員研修を担う教育委員会と協働しての本モデル事業の取組は、多くの教育課題を抱える学校現場にあって、これからの学校教育を担う実践力ある教員の育成につながるものと、多くの学校教育関係者から大きな期待が寄せられた事業であったと言える。

その事業の成果と課題を踏まえながら、初任者に対する校外研修を専修免許状の習得を可能にする教職大学院での授業に位置づけ実施した「初任者研修プログラム」は、初任者への教員としての基本的な知識・技能の習得にとどまらず、しっかりとした理論に裏付けられた総合的な実践力を有した教員を育てるという点で大きな成果があると考えられるが、実際に本初任者研修プログラムを推進する中、その成果とともに課題もいくつか見えてきたことも確かである。成果については今後のプログラムの充実に活かし、課題については改善策を模索し課題解決の具体的な取組を推し進めながら展望へとつなげていきたいと考えている。

2. 初任者研修プログラムの成果

初任者の成長については、自己の研鑽や連携協力校の学校長をはじめとする教職員等の指導によることは無論だが、そのことに加えて、教職大学院の授業や学校訪問指導を核とした「初任者研修プログラム」が大きく寄与していると考えられる。ここではプログラムとの関わりに視点をあて初任者の成長を記述するとともに、プログラムの成果と位置づけたい。初任者の成長やプログラムの成果については、モバイル端末で撮影した授業風景の動画、学校訪問時に行う授業評価シート、本年11月上旬に実施した「教職大学院と連動した初任者研修プログラムに係る調査」の結果、初任者に深く関わる教職大学院教員による専攻会議での情報交換等から判断した。

なお、本初任者研修プログラムの成果については、理論と実践の融合を核とした教職大学院の授業、授業実践力の向上を核とした学校訪問指導という二点から記述する。その概要については次のとおりである。

2.1. 理論と実践の融合を核とした教職大学院の授業による成果

初任者が受講する教職大学院の授業シラバスとカリキュラムについては、学校現場で実践経験豊富な大学教員が中心となって編成にあたり、初任者の教育実践において適時役立つよう、学級担任や教科担任としての年間の実践を時系列に見据えた内容とし、教師に必要な知識と技能を習得させることとした。

教職大学院での実際の授業は、児童生徒の成長・発達と創造的な学力を保障する授業実践力の育成の観点から、授業設計の方法、授業展開の方法、授業分析の方法、授業評価の方法、授業改善の方法など、「授業・教材研究」科目群の内容に特化している。



図1 教職大学院における授業風景

その結果、初任者は教職大学院での学びが学校現場において有効に働くことを実感するとともに、理論に裏付けられた教育実践の重要性を体験的に学習できた



図2 教職大学院教員による示範授業

という点で成果があった。同時に、初任者の見通しの持てない学校生活への不安を払拭し、安心して日々の実践に取り組み、初任者の多くが教員としてのやり甲斐や自己有用感を抱くようになったことも大きな成果である。

また、初任者を指導する教員の全授業は、常に教職大学院の複数教員（10名）により参観され、週1回開かれる専攻会議においてその内容と方法、初任者の学習状況と成長度について話し合われるため、教職大学院における初任者研修のあり方や、成果と課題について不断に確認でき、多角的にその改善・充実を図ることができた。

さらに、初任者の授業改善を目的とした教職大学院教員による示範授業、初任者による模擬授業が、10回近く実施され、初任者はこうした授業を通して優れた授業の構造とポイントについて理解し、自己の授業課題の把握と授業改善への取組に努めることができた。初任者にとって教職大学院の授業日程は相当過密ではあるが、教師という教える立場から授業実践力向上を目指し学ぶ立場にその身を置き換えるためか、どの初任者も学習意欲は高く学びを享受していた。教師としてのこうした学ぶ楽しさの体験は、児童生徒が楽しく学ぶことのできる授業実践につながるとともに、初任者の「学び続ける教師」への成長につながるものであり、教職大学院と連動した初任者研修の成果の一



図3 生徒主体の学習活動

つにあげられる。

2.2. 授業実践力の向上を核とした学校訪問指導による成果

週1回の拠点校指導教員と教職大学院教員による授業参観と指導助言を受ける中、初任者の教材研究に少しずつ深まりが見えはじめ、教材をどう扱えば児童生徒主体の授業になり、学習内容が定着するかを初任者は強く意識するようになった。その結果、工夫した教具の準備やICT機器の活用、児童生徒の多様な学習形態や個を生かす習熟度学習など、各初任者は自己の研究課題にそった取組を積極的に進めていくようになった。このことは教師としての大きな成長であり、拠点校指導教員と教職大学院教員の連携による指導の成果である。

初任者に対してどのような指導や助言をすべきかについては、教職大学院教員と拠点校指導教員が、授業記録や授業評価シート等により初任者の授業力の状況を十分に把握し、カンファレンスに臨む前の丁寧な協議を行う。そのため、カンファレンスでは各指導助言者は一定の判断基準に基づいた適切な指導助言ができている。このような結果、初任者は必要な内容に対する的確な指導助言が受けられ、授業の振り返り、課題への気づき、課題解決策の熟考を冷静に行い授業改善につなげることができた。そしてカンファレンスの回数を重ねるにつれ、初任者は教師としての力量を高めていった。

実際、「教職大学院と連動した初任者研修プログラムに関する調査」における初任者への調査項目3に対する回答を見ると、「授業における教科指導力・指導技術」、「授業分析力」、「授業デザイン力」、「教科指導等における専門的知識」で、初任者のほぼ全員がその伸びを自覚している。

また、拠点校指導教員と教職大学院教員についても、週1回の授業参観とそのあとの協議を繰り返すことで、授業参観や指導助言の視点が明確になり、初任者に対する的確な指導や助言ができるようになってきた。このことも「教職大学院と連動した初任者研修プログ



図4 カンファレンスでの授業の振り返り

ラム」としての大きい成果と言える。

カンファレンスでの授業の振り返りについては、初任者が主体的かつ客観的に授業を振り返ることができるよう、モバイル端末で撮影した授業風景の動画の視聴からはじまり、拠点校指導教員や教職大学院教員が授業上の課題と判断した内容についても、初任者自らが自己の課題と気づき捉えることができるように、初任者の授業の組立に対する考えを確認しながら適宜指導助言を行うことを基本に進められた。このことにより初任者の授業力や省察力が着実に向上している。調査項目3:「本プログラムにおける、授業参観やカンファレンスの実施等により、あなたが成長していると思われる点を、次からすべて選び○をつけてください。また、その内容について具体的にお書きください。」

この調査項目3の前半部分に対する回答については、次のような結果になっている。

【回答結果】

- ・授業における教科指導力、指導技術 10人/10人中
- ・授業分析力 9人/10人中
- ・授業デザイン力 8人/10人中
- ・教科指導等における専門的知識 8人/10人中
- ・授業中における児童生徒への対応力 10人/10人中
- ・児童・生徒理解力 5人/10人中

また、その内容に関する具体的記述については次の通りである。

【自由記述】

・基本的な学習規律はもちろん、授業や単元の構成まで丁寧に指導していただいているため、毎回頭をひねりながら授業を考えている。自身で実感したことはあまりないが、カンファレンスでの話の内容が高度になっていたり、学級のことでほめていただいたりすると、全般的に成長できていると思う。

・放課後のカンファレンスで、的確に私の問題点(特に板書や時間配分など)を指摘していただけるので、次回での改善につなげやすく、自分自身でも成長していると実感できています。

・カンファレンスでは、たくさんの助言をいただいていると思います。特に授業デザインについては、細案を作るなどすることで、1時間のイメージをより鮮明に持てるようになりました。

・カンファレンスでは、私がしきれてなかった教材研究の部分や授業中の発問の仕方、逃さないすばらしい発言を聞くことができます。普段の授業での子どもの様子から、「最近A君何かあったのかな?たくさん声かけてあげてね。」とアドバイスをいただくことがあって助かっています。

・カンファレンスは、授業における子どもたちへの対応や授業づくり(教材研究)、授業における導入

のあり方、展開方法、発問、切り返し、板書の仕方など、様々な角度から自分の授業を見つめる機会になるので、こういった学びを意識しながら少しでも成長していきたいと思っています。これからもっともっと目の前にいる子どもたちの反応やつまづきをしっかりと想定しながら、しっかりと授業づくりを行っていきたいです。

3. 初任者研修プログラムの展望

「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」を推進していく中、初任者の教員としての力量形成に一定の成果を上げていることに確かな手応えを感じつつも、いくつかの課題もまた明らかになってきている。

初任者が「学び続ける教師」として今後も確実に成長していくためには、教師としての総合的な実践力向上をめざす仲間との存在と学び合える環境が必要である。各連携協力校には、初任者をはじめ、若手教員や中堅教員、経験豊富な教員に、学ぶ意欲を持った熱心な教員が多い。そうした教員に学び合う場としてカンファレンスが積極的に活用されれば、カンファレンスそのものがさらに充実し、より質の高い学び合いの環境が各連携協力校において創出され、学び続けるモチベーションの維持・高揚が学校全体に漲るものと考えられる。

実際、「教職大学院と連動した初任者研修プログラムに関する調査」における学校長への「調査項目1」に対する回答を見ると、学び合う環境の重要性を強く意識し、その環境づくりに取り組んでいることが分かる。

また、本初任者研修プログラムの実施が、各連携協力校の教員にどのような影響を与えているかについては、「調査項目5」に対する回答の具体的な記述を見れば一定理解できる。

調査項目1：「初任者や若手教員が『学び続ける教師』として成長していくため、貴校が重要と考え取り組まれていることは何ですか。」

【回答】（学校長より）

・学びたい、成長したいと思える環境をつくっていくこと（学び合いの学校風土づくり）

・授業力を向上させることや子どもの学習意欲を高めること→実現するための学校風土の構築

（取組内容）

- 互見授業実施 ○ 教科部会開催（定期的）
- 校長の授業観察と振り返り ○ 先進校視察
- 学習環境づくり（教室掲示など）などの情報伝達
- 学んできたことの全体報告 等々
- ・モチベーションを高めるためのイノベーションを

考えた取組を推進する。

・授業力向上ということにおいて、校外での授業研等に行く機会をつくり、多くの実践に触れさせること。また、自らの授業公開等で、日々高めるための意識を持続させていく。

調査項目5：「本プログラムが貴校教員の研修に対する意識に良い影響があったと思われますか。一つ選び○をつけてください。また、理由について具体的にお書きください。」

この調査項目5の前半部分に対する回答については、次のような結果となっている。

【回答】（学校長より）

・「とても良い影響があった」・・・1校/5校中
 ・「良い影響があった」・・・4校/5校中

また、理由に関する具体的な記述については次の通りである。

【理由】（学校長より）

・初任者が子どもたちのために頑張っている姿を見ることで、他の教員たちも頑張ろうという気持ちになっていると思います。お互いに学び合おうとする風土が育つためにはよいと感じています。

・なかなか授業参観やカンファレンスに参加することは難しいので、年度初めに予定していたほどの活用はできていませんが、初任者が熱心に学んでいる姿を側で見ていて、まわりの教員の意識が変わってきたように感じています。

・定期的に外から人が入ってきて、初任研を進めていく中で、研修を積み重ねていくことや、新しい考え方や手法を取り入れる様子が同じ教科内の教員同士で見られるようになってきている。こうした傾向は大事にしていきたい。

・初任者への週1回の授業を通しての研修会は、間違いなく彼らの力量を伸ばすことにつながっていると思います。特に、大学の先生の助言がすばらしいです。

本年度の「教職大学院と連動した初任者研修プログラム」に参加した10名の初任者は、各連携協力校で日々の実践に取り組みながら、週1回の学校訪問指導を受け、月2回の教職大学院での授業を受講するという生活の繰り返しの中、学校や校種を超えて良好な人間関係を構築し、今では互いに励まし学び合う仲間へと成長した。この仲間は初任者一人ひとりにとって大きな財産であり、その存在は彼らが「学び続ける教師」へと成長する原動力となっていると言える。多くの管理職が強く求めその創造に努める「質の高い学び合いのできる学校づくり」に初任者の一人ひとりが貢献できることを願うとともに、そこに本プログラムの展望を見出したいと考える。